

# 令和7年度 自己評価・学校関係者評価報告書

令和8年3月4日  
学校法人念法学園  
幼稚園型認定こども園念法幼稚園

## 1. はじめに ～評価も「つなぐ」～

本年度、本園は「つなぐ」をテーマに園づくりを進めてまいりました。

子ども・保育者・保護者・地域、そして環境。それぞれが孤立するのではなく、つながり合うことで園はより豊かになると考えています。

本報告書は、単なる振り返りではなく、自己評価と学校関係者評価が対話としてつながり、次の一年へと歩みを進めるための出発点として位置づけています。

## 2. 本園の教育目標

園訓「げんきなからだ・すなおなこころ・かんしゃのきもち」を大切にし、一人ひとりが安心して  
きる環境の中で、遊びや生活を通して多様な体験を積み重ね、生きる力を育む。

また、子どもたちの「今」と「未来」を大切にし、人格形成の基礎を培うことを目的として、環境を通して行う教育を実践する。

## 3. 本年度、重点的に取り組む目標

本年度は「つなぐ」を軸に、以下の5つを重点項目とした。

1. 保育者同士をつなぐ（チーム保育の深化）
2. 保育室と園庭をつなぐ（保育環境の充実）
3. 園と家庭をつなぐ（保育の可視化）
4. 実践と学びをつなぐ（研修と専門性向上）
5. 安心と挑戦をつなぐ（安全管理）

#### 4. 評価項目の達成及び取り組み状況（自己評価）

|   | 評価項目                 | 達成及び取り組み状況                                                                                                                                                                                                                                                 |
|---|----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 保育者同士をつなぐ<br>（チーム保育） | <p>本年度は、子どもの姿を共有し合い、チームで育ちを支える意識の向上を図った。職員の自己評価からは、日々の保育の中で子どもの様子を伝え合い、共通理解を深めようとする姿勢が高まっていることがうかがえる。</p> <p>一方で、共有の場は設けているものの、学年や立場を越えて十分に循環しているかという点では、さらなる工夫が必要である。</p> <p>今後は、子どもの姿を軸とした対話の機会を充実させ、共有が園全体の学びへとつながる仕組みを整えていく。</p>                       |
| 2 | 保育室と園庭をつなぐ<br>（保育環境） | <p>子どもの姿から環境を再構成する意識は確実に高まっている。前日の振り返りを活かした環境の見直しや、園庭環境の改善に向けた取り組みも継続された。</p> <p>しかし、環境構成のねらいや意図の言語化にはばらつきが見られた。環境を整える力は着実に育っているが、その意図を共有する段階へ進む必要がある。</p> <p>今後は「なぜその環境なのか」を語り合う機会を増やし、保育室と園庭、日常と行事が有機的につながる環境づくりを進める。</p>                                |
| 3 | 園と家庭をつなぐ<br>（保育の可視化） | <p>ポートフォリオやドキュメンテーションを通して、子どもの育ちを保護者と共有する取り組みは定着しつつある。さらに、学期ごとの保育記録発表を通して、子どもたちの遊びや育ちのつながりを振り返り、共有する機会を設けてきた。これらの発信を通して、保育者自身の子ども理解が深まっていることも自己評価から読み取れる。</p> <p>一方で、発信の内容や質に差があるとの課題も見られた。</p> <p>今後は、保育の可視化を単なる情報提供にとどめず、子どもをまんなかにした信頼関係づくりへとつなげていく。</p> |
| 4 | 実践と学びをつなぐ<br>（研修）    | <p>園内外の研修や公開保育への取り組みを通して、学びを深める機会は充実している。学びを実践に生かそうとする姿勢も見られる。</p> <p>しかし、学びが個人の中で止まり、園全体への共有が十分でないとの課題もある。</p> <p>今後は、研修内容を共有する仕組みを整え、個々の成長が組織の成長へとつながる体制を強化する。</p>                                                                                       |
| 5 | 安心と挑戦をつなぐ<br>（安全管理）  | <p>安全対策や訓練の実施により、安心して過ごせる環境づくりは着実に進んでいる。リスクとハザードの理解も共有されつつあり、安全への意識は高まりつつある。</p> <p>一方で、挑戦をどこまで支えるかという判断の難しさを感じる声もあった。しかしそれは、子どもの育ちを真剣に考えているからこそ生まれる葛藤でもある。</p> <p>本園が大切にしている「育ちに必要なリスク」を改めて共有し、安心と挑戦の両立を図っていく。</p>                                        |

|             |                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>総括評価</p> | <p>職員の自己評価からは、保育実践は着実に深化していることがうかがえる。子どもの姿を大切にし、環境を通して育ちを支えようとする姿勢は園全体に広がりつつある。一方で、「共有」「言語化」「全体化」という点に課題が見られた。これは未熟さではなく、園が次の段階へ進もうとしている証である。本年度のテーマ「つなぐ」は、実践の中で見えてきた課題そのものであり、今後の方向性でもある。本園は今後も、子どもをまんやかに据えながら、個々の実践を園全体の学びへと循環させ、対話を重ねることで、より豊かな園づくりを進めていく。</p> |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 5. 学校関係者評価

本年度の取り組みについて、学校関係者より以下の意見が出された。

### (1) 保育環境・活動

自然素材や広い園庭を活かし、子どもが主体的に遊べる環境が構築されている点は高く評価できる。一方で、クラス間での環境構成の質に差が見られるため、園としての最低基準（絵本の冊数等）を明確にすることが望まれる。

### (2) 安全管理・施設

玩具の定位置化により、子どもの自律的な片付けが定着し、大きな怪我也減少している点は成果である。今後は、階段裏の錆など施設の老朽化対策を計画的に進めるとともに、より実践的な不審者侵入訓練の実施が求められる。

### (3) 組織運営・連携

学年内での15分間共有により情報共有は円滑に行われているが、今後は異年齢間での連携強化が期待される。また、困り事の共有だけでなく、保育の「良かった点」を互いに発信し、称賛し合う文化を育むことが、さらなる組織力向上につながる。

### (4) 家庭連携・ICT活用

ポートフォリオ等による発信は継続されており、一定の評価を得ている。AI活用については事務効率化を目的として慎重に導入を進める方針であり、教育の本質を損なわない活用が望まれる。今後は体験型ワーク等、新たな関わり方の検討も期待される。

全体として、園は着実に改善を重ねており、今後は「つなぐ」というテーマのもと、組織としての一体感をさらに高めていくことが期待される。

## 6. 今後の取り組み

- ・チーム保育のさらなる定着（担任とフリーの関係強化）
- ・環境構成の底上げ、意図の共有と言語化
- ・保護者との協働関係の深化
- ・学びを循環させる仕組みづくり
- ・業務面におけるAIの活用

評価を次の実践へとつなげる循環を大切にし、子どもたちのよりよい育ちを支えていく。